小さい花のテレジア

文＊蛯名　啓　　絵＊石倉淳一

小さい花のテレジア

文＊蛯名　啓
絵＊石倉淳一

女子パウロ会

もくじ

はじめに 6

1 白い小さな花 9

ひみつ 10

小さな花のたんじょう 12

マルタン家の人びと 16

死なないで! 21

元気なおちびちゃん 27

愛の花たば 33

天国で会いましょう 39

2 ビュイソンネ 45

新しい家 46

ビュイソンネの日々 49

わたしの王さま 54

考えます 神さまのことを 58

あらしの夜 64

初聖体 67

苦しみのはてに 73

3 第二のたんじょう 79

最初の子ども 80

カルメル会にいれてください 85

イタリアへ 90

神さまがお望みなら 96

あと三か月 102

おわかれ 106

4 天国への道 111

カルメル会 112

おささげ 118

小さな道 123

ほほえみのベール 127

ばらの雨をふらせましょう 135

愛の勝利 142

はじめに

世界じゅうの教会では、毎年、十月一日を、小さい花のテレジアの記念日としておいわいしています。けれども、このような記念日や、テレジア（テレーズとかテレサともいいます）という名まえを、はじめて聞いた人もいるでしょう。

小さい花のテレジアは、いまからおよそ百年まえ（一八七三年）フランスに生まれました。そして二十四歳のわかさで亡くなるまで、ほんとうに小さい花のように、ほとんど人に知られず、ひっそりと一生をすごしました。

このような生き方は、テレジアが心から望んでえらんだ生き方でした。けれども、有名になりたいという気持ちをすこしももたず、ただ神さまだけに知られることに満足していたテレジアに、神さまはどのようにお答えになったのでしょうか。

テレジアが亡くなってから、テレジアが書いた「小さい花の物語」を読んだ人びとは深く心を打たれ、テレジアを自分の心の友としてたいせつにするようになったのです。

いまあなたが手にしているこの本は、テレジアについて書かれたたくさんの本の中から、とくに「ある家庭の物語」と、テレジアが書いた「小さい花の物語」を参考にして書きました。

たくさんの人びとからしたわれ、愛されているテレジアは、この本を読むあなたの、きっとよいお友だち、お姉さんにもなってくれることでしょう。

えびな　ひろ

1 白い小さな花

ひみつ

テレジアは、大きなひみつを心にいだいて、お父さんのいる庭に出ていきました。

お父さんはさっきから、ばらの花のあまいかおりがただよう庭の木かげで、すこしずつかわってゆく夕ぐれの空をながめていました。

「お父さま、お話ししたいことがあるのです。」

「なんだね〝女王さま〟、話してごらん。」

お父さんはいつもテレジアを〝わたしの女王さま〟とか〝小さな女王さま〟とよんで、たいそうかわいがっていました。

テレジアは、お父さんのやさしい目を見ると、すぐにはことばが出ませんでした。

けれどもやっと心をおちつけて、ながいあいだ心の中にもえつづけている一つの望みをうちあけました。

お父さんは、じっと耳をかたむけて聞いていました。話しおわると、ふたりの間にちんもくがつづきました。お父さんの目には、なみだが光っているようでした。

テレジアは、いったいなにを話したのでしょう。どんなひみつをうちあけたのでしょう。

お父さんは立ちあがって、ゆっくりと庭のはずれの、へいのそばにいきました。そしてそこにたくさんさいている、白い小さな花を一本つんでテレジアにわたしました。

「よく見てごらん〝女王さま〟、だれもわざわざここにたねをまいたわけではないのに、こんなにきれいにさいている。みんなをよろこばせるようにと、神さまが育ててくださったんだね。そしてこんなに愛らしくさかせてくださった。この花のように、神さまは、おまえをたいせつに守って、育ててくださったのだね。」

ほんとうにそうです。なんとすばらしいことでしょう。神さまは、お父さんのようなひろい心で、ひとりひとりをたいせつにしてくださるだけでなく、こんなに小さい花までもおわすれにならないで、ちゃんとさかせてくださいます。

この小さな花は、わたしのような気がするわ――。

テレジアはそう思って、たいせつに台紙にはってとっておきました。

お父さんが話してくれた小さな花の物語は、テレジアの一生をそのままあらわしているようでした。

テレジアは、もうすぐ十五歳になるのです。

小さな花のたんじょう

一八七三年一月二日の真夜中のことです。

その夜、アランソンの町の人たちは、もうほとんどねむりについていました。

こな雪がしんしんとふっていて、通りをまっ白にうめていきます。街灯のあかりが、ぼうっとまるく光っています。町の中でただ一軒、サン・ブレーズ街のマルタン家の二階のまどだけは、あかりがともっていました。